

【書評】

「行方」を見つめて

山根由美恵著『村上春樹 〈物語〉の行方—サバルタン・イグザイル・トラウマ—』

内田 康

(京都府立大学 共同研究員)

久しく俟たれていた山根由美恵氏の二冊目の村上春樹研究書が、遂に上梓された。一冊目に当たる『村上春樹 〈物語〉の認識システム』(若草書房、2007年)の刊行から十五年、この間に氏が日本国内外で世に問うてきた村上研究の膨大な成果のうち、前著で取り上げられた長篇『ノルウェイの森』までの時期に続く諸作品を考察した論考を、副題となっている「サバルタン」「イグザイル」「トラウマ」の三つのキーワードを軸に選りすぐってまとめた一書である。まず、その構成に目を向けると、全体は「はじめに」「あとがき」を除いて第一部「「イグザイル」(故郷離脱)期の文学——一九八八～一九九六」、および第二部「Haruki Murakami 形成期の〈物語〉——一九九七～二〇一九」の二つに大きく分かれ、前半は作家が生活拠点を欧米に置いて執筆した長短篇の考察が四章分に、また後半は阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件とを契機に日本へ戻って以降、逆に世界的な読者を獲得していく時期の大規模な仕事を中心とした分析が二章分に、それぞれ整然と配列されている。前著の扱った対象が、デビューして十年足らずの作家の早期のテキストに限られていたのに対し、新著ではその後の彼の三十年余にわたるキャリアを覆い尽くそうとするかの如く、山根氏の意欲的な姿勢は、村上の作品群はもとより、例えば同時代において彼と同じく地下鉄サリン事件の被害者たちをモチーフとした他の作家たち——辺見庸、重松清、馳星周、川上弘美ら——の作品までも、対比的検討の俎上に載せずにはおかない(第二部第一章)。

そして次に注目すべきは、山根氏のこの新著における、前著で追究されていた研究モチーフの連続性と深まりである。前著において「〈物語〉の認識システム」を村上春樹文学の核心的要素であると喝破した氏は、日本の地を離脱した後に作家の〈物語〉が如何なる軌跡を辿ったのか、その「行方」を見定めようと試みる。そこで、彼の画期としての「イグザイル」をどう押さえるかが、意味を持ってくるわけである。『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)から「TVピープル」(1990)への流れを、日本を離れたことからくる小説家としての苦闘と、そこからの復活として捉え、その後には結実する『ねじまき鳥クロニクル』(1994～1995)という大きな成果、そして90年代半ばの日本社会を震撼させた二大事件に導かれての故郷への帰還と、「イグザイル」経験によって培われた力を活かしての、新たな仕事の展開に至るまでの輪郭づけを通し、従来「デタッチメントからコミットメントへ」と呼ばれてきた村上の文学的変遷が把握し直されることになる。かかる前提のもと、本書全体を貫く最重要課題である「サバルタン」への眼差しという視点が、それと密接な関わりを持つ「トラウマ」をめぐる問題とともに浮上してくる。山根氏によれば、そこではアントニオ・グラムシ以降の「サバルタン・スタディーズ」の流れを参照しつつ、「村上文学における「従属的・

副次的（存在）」に光を当て、彼・彼女たちの声なき声を拾い、それらの存在を沈黙させている圧力を顕在化させること」（2頁）が目的とされており、実際本書でも、第一部の第二章（男を「拒む女」たちの諸相）と第三章（「母」に〈自立〉を阻まれる妻）、および第二部の第一章（『アンダーグラウンド』その他）が、副題に「「サバルタン」への眼差し」を掲げているし、また村上作品において「トラウマ」からの回復がどう描かれているか（『ねじまき鳥クロニクル』や『レキシントンの幽霊』等）も併せて追究されていく。これらも、前著で山根氏が詳細に論じていたところの「マイノリティー」（第一部第二章第一節の『羊をめぐる冒険』論）や、「トラウマ」（第二部第二章第三節の「土の中の彼女の小さな犬」論）に関する考察などが、十年余りの時間をかけて温められ、熟成された結果にほかならない。ここに氏の、研究者としての歩みの着実さを垣間見る思いがすると同時に、我々がややもすれば見過ごしがちな、村上春樹の文学が持つ重要性や豊饒性を指し示す、確かな批評意識をも感じ取ることができる。

ところで一方、本書のスタンスは決して、諸手を挙げて村上の礼賛に終始するといった単純なものではない。とりわけ評者にとって興味深いのは、村上文学における如上の「サバルタン」への眼差しや、それらを抑圧する力の析出へと重きを置く山根氏が、本書の第二部になると、村上の作品に対する不満や批判を徐々に強めていく点である。例えば『アンダーグラウンド』（1997）を取り上げた第一章第二節を見よう。「内なる闇や暴力性を地震やリトル・ピープルといった寓意で描き出すことは、〈サリン事件〉で見出した問題を普遍化させ、〈物語〉としての可能性を広げたと言える。ただ、それは他者と痛みを「分有」できず、理解されないことで苦悩する〈サリン被害者〉の〈孤独〉という独自性を遮蔽する面を持つ」（251頁）。或いは『1Q84』（2009～2010）を扱った、第二章第二節の場合。「BOOK3の青豆の妊娠と天吾との再会は、「児童虐待」とも言える扱いを受け一度は家族と決別した青豆と天吾が、自らの意志で〈家族〉を作り上げ、暴力的なシステムを内包する教団の消滅化を図るといふ、システムに対抗する〈物語〉を目指すものであった。〔中略〕もし愛と〈家族〉の描き方が「予定調和」を超えるものであったならば、〈物語〉の可能性はより広がったのではないだろうか」（343頁）。そして第二章第三節の『騎士団長殺し』（2017）になると、評価の厳しきは最高潮に達する。「「騎士団長殺し」は〈メタ・テキスト〉性が強く、他テキストと比較するとそれぞれのキャラクターの「影」「闇」への向かい方が甘い。そして、先行テキストを超えるような批判的再創造の方向性を有するのではなく、「私」とユズと室の三人の「共生」の未来が強調される。〔中略〕〈メタ・テキスト〉という方法の批評性、「共生」の結末という物語の蓋然性、双方共中途半端である」（366頁）。どれも尤もな指摘だと思うが、氏の口からこうした批判が出てくること自体、実は近年村上の目指す〈物語〉の方向性が、山根氏の作品評価基準からズレてきているという事態を示している可能性もあって、それこそ村上春樹の「〈物語〉の行方」の把握の難しさを逆説的に表したものだとしたら非常に面白い。本書で山根氏が提示された、抑圧的なシステムに対抗する「サバルタン」たちという図式の分析概念としての有効性は否定すべくもないが、その図式から外れた作品展開を評価する術はないのだろうか。

さて、本書刊行後も相変わらず次々と新しい課題に取り組んでいる山根氏だが、目下特に力を入れているテーマとして、村上春樹とアダプテーションに関する研究があり、本書の末尾に置か

れた第二部第二章第四節の舞台版『海辺のカフカ』(フランク・ギャラティ作)に見られる「戦争」表象の分析も、その成果の一端を示すものである。映画に舞台、バンドデシネなど、村上作品のアダプテーションに海外発のものが目立つことから、こうした題材に目を向けていくのは、既に世界的に享受されている Haruki Murakami の今後の行方を占う上でも有意義だろう。のみならず、本書は村上春樹研究に携わる者にとって様々な切り口の宝庫であり、どこから開いてみても、何らかのヒントを提示してくれること請け合いである。村上が作家として今後どこへ向かっていくのか、その「行方」に関心のある読者には、ぜひ一読をお勧めしたい。